

## 日本史における外国人の視点 ——英米人の日本史研究に対する批判的検証——

大 杉 由 香

はじめに—私たちが日本史研究で陥りがちな陥穽—

今やどの分野でも外書講読は不可欠なものであるが、これは国際化の時代、研究対象を日本に定める日本史とて同様である。もっとも日本の分析をしていると、国際関係に焦点を当てる場合ならともかく、概して他分野に比べて外書の必要性があまり感じられないことは多い。無論、最近では日本史の専攻と言っても、国際交流も盛んになり、留学者も増えてきているが、研究者全体で見ればやはり国内志向が他分野より強いであろう。恐らくこれには、日本に住み日本語を母国語としているという「強み」が無意識なうちに働いていると思われるが、この「強み」は同時に弱みでもあることを留意する必要がある。

第一に「強み」だけに依存していれば、日本に関する情報の世界発信がしにくくなるという問題が浮上する。確かに各国の歴史は国際関係上に成り立ち、他国とある程度共通性・普遍性を持っており、日本もその例外でないから、日本に関する世界発信はそれなりに意味がある。ただし別稿でも触れたように<sup>(1)</sup>、特に歴史研究における普遍性は経済理論と比べて限界があるし、実際、日本史研究の英語版を読むのは、英語圏もしくは日本に関心は寄せつつも日本語ができない研究者や学生、日本人の一部の研究者に留まるであろう。新渡戸稲造の『武士道』のような学界を超えた世界的反響は例外であって、世界発信は意外と当人たちが考えるほど広範囲に及ばないのが普通で、むしろ日本人の多くに読まれるような啓蒙的な歴史書の方が社会的影響力は強い。それと言うのも、何処の国でもそうであるが、歴史研究は研究者であれ素人であれ、基本は自分たちのアイデンティティを探ることを無意識に前提としているからで、従って歴史研究の中で最も注目を集めがちなのは、母国を研究対象としてかつ母国語で書かれた物となる。勿論、欧州のように歴史的に国境線がよく変わり、何ヶ国語も公用語になっている所では話は多少変わってくるであろうし、こうした議論自体がグローバル化の時代、国民国家的発想で古いと言われる恐れは

あるが、とは言え、いくら国際的な歴史研究者でも生まれ育った国や母国語と全く無関係であることはありえない。それはともかく、前述の「強み」に安住するのは問題であるものの、他方で母国への発信を等閑にした歴史研究や欧米で流行の歴史研究の視座に乗ることばかり考えているのも同様に性質が悪いのである。いずれにせよ、歴史研究では研究者が自分の母国をどう位置付けるかは極めて重要なファクターで、位置付け次第で読者をどれだけ説得できるかも影響してくる。

その関連で言えば、「強み」が弱みになる第二の理由は、母国の位置付けが殆ど意識されず、自明の理とされてしまうことである。また私たちは日本に住み日本語を使って生活をしていると言っても、日本のごく一部を知っているに過ぎず、さらに日本国籍があるだけであたかも外国人よりも日本について知識があると思込むことは妄想以外の何物でもない。こうした妄想を打破するひとつの手がかりが外国人による日本史研究や見聞録であろう<sup>(2)</sup>。ただ留意する必要があるのは、イアン＝ブルマの叙述にもあるように、「歴史について書くのは…(中略)…結局は個人的な活動だ。(中略)出身国や文化的背景は無視できないとはいえ、過大評価すべきものでもない」<sup>(3)</sup>という事実で、現にベテランのジャパノロジストの研究は、国籍の壁を全く感じさせないことも多い。

だが出身国や文化的背景が個別研究のあり方を規定することが多いのも確かで、現に筆者の院生時代、韓国や台湾からの留学生たちは日本経済史を専攻しながらも、研究の中心を自分の出身国の産業等に置き、植民地研究が多かったことを思い出す。しかし仮に外国人側が自分の出身国や文化的背景を感じさせない研究を発表したとしても、それを受けとめる日本人側の態度は無意識なうちに相手の出身国や文化的背景に影響されることが少なくない。たとえば、外国人の日本に関する研究や見聞録の原文は英語であることが多いが、これは優れた研究が英米に割合集中していることもあるものの(英米人以外でも英語で日本について発表する時、英米の出版社を通すことが多い)、同時に日本人の言語能力の限界および日本の周辺諸国の人々の声には比較的鈍感で無視しがちであることも影響しているよう。歴史学をはじめ、近代的な学問の多くが欧米から入ってきた経緯もあり、学問のうえでは未だに日本人は脱亜入欧の意識が何処かに残っているのだと思われる。

しかし英米中心といった偏りがあるにしても、外国人の日本史研究や見聞録を見る必要があるのは、比較史的な発想や意外な視点等が見つかるからで、そのことによって重箱の

隅をつついたような発想や日本史研究は日本人のものといった島国根性の呪縛から解放されると思われるためである。では英米人の日本史研究や見聞録から具体的にどういった点を学ぶべきなのかを次章では考察したい。

## 1. 英米人の日本史研究から何を学ぶか

### —言語帝国主義から見えてくることとその問題を越えて—

英米人の日本史研究や日本見聞録は翻訳された物だけでも膨大で、全部目を通すだけの能力も時間も筆者にはないが、今回英文の日本史研究を収集して気付いた点は、英語で書かれた日本史研究は日本語に翻訳される場合が多いが、日本語の日本史研究が英語に翻訳されるケースは少ないことである。これはアンドルー＝ゴードンも『日本の200年 徳川時代から現代まで』(上)(森谷文昭訳、みすず書房、2006年)の日本語版へのまえがきで述べており<sup>(4)</sup>、それによればゴードンの英語文献リストの3分の1にあたる60点は日本語訳が出されていたが、日本語文献で英語にされた物は10点程度に過ぎない。これには英語のできる日本人の方が日本語のできる英米人より多いことも当然影響しているに相違ないが、他方で英米人等の研究に対する日本人の過敏な反応とそれとは対照的な英米人の反応が浮かび上がる。それはともかく、優れたジャパノロジストの多くは流暢な日本語を使うものの、他方で彼等は自分たち独自の研究を至上のものとし、翻訳に対しては日本人研究者以上に見下しているとも見受けられる。

翻訳作業は周知のように労力が甚大である割には研究業績として高く評価されにくいのは何処も同じであるが、それでいてジャパノロジストの研究は翻訳や英語文献に負うところが大きい。たとえばジャパノロジストとして米国では名高かった日系人Mikiso Hane(日本名:羽根幹三)の著作*Modern Japan*は3刷を重ねるほど読まれ、その内容は徳川時代以前から昭和天皇の死までを扱っているだけでなく、経済・政治・社会・文化の多岐にわたる554ページにわたる大著であるが、Selected Bibliographyの欄を読むと気付くのは、その殆どが英米人による研究や翻訳、日本人による英語著作が占め、翻訳されていない日本語文献は皆無に近いことである<sup>(5)</sup>。Hane自身は10代の頃に広島で過ごしているうえ、日本語による日本史研究の翻訳を出している位であるから<sup>(6)</sup>、言語能力は日本語も英語も母国語レベルであった訳だし、人種差別的な意識とは全く無縁であったと考えられるが、その

彼でさえ日本語文献を殆ど省いたと思われる Selected Bibliography を作成したということは、少なくとも米国では日本語文献を見なくても日本理解が可能といった意識が民族を超えて共有されていると言えよう。これは米国だけでなく、英国における研究でもほぼ同様と思われ、これは言語帝国主義的発想でもある<sup>(7)</sup>。この点に関して言えば、日本人による西洋史研究では入門書でも英語等の他言語文献を必ず掲載しており、資料バランスの点では英米人の日本史研究より模範的であり、その分歴史観の偏りも少ないのではなかろうか。

もともと日本人の西洋史研究と英米人の日本史研究は、どちらも自国もしくは共通の言語文化圏に向けて、これらとは異なる政治経済体制や文化を伝えるといった啓蒙的役割を担っている点では共通している。しかし英米人の日本史研究は言語的広がりもあって、その役割はより強く、時には英語圏でない欧州にまで及ぶこともある。実際、英国を中心に活躍するゴードン＝ダニエルズとラインハルト＝ドリフテ（ドイツ出身）は、1945年以降の欧州と日本の関係に焦点を当て、EC企業研究で知られる吉森賢等も起用しながら、両者の関係改善を目論んだと思われる小冊子を発行したが<sup>(8)</sup>、これは英国における知性が欧州と日本の間を仲裁する印象すらあり、英語の広い汎用性が啓蒙的研究を政治的な場に押し上げたきらいがあった。換言すれば、英米人の日本史研究は自国語中心主義も影響して歴史観の歪みが考えられる一方で、その影響力は広く先進諸国に及ぶといったものなのである。歴史観問題に関しては次章で後述するが、これでは日本人が翻訳に躍起になるのも無理からぬことかも知れない。

なおこの事態を日本人側から見れば、日本史研究は外国で進んでいるとは言え、日本語による研究は主立った物を除けば無視されていることになり、先進諸国の中で日本史研究の多くは相対的に低い扱いを受けていると認識されよう（この点では韓国・台湾・中国の日本史研究者が日本語文献を重視するのは対照的である）。ところが日本人研究者は英米での研究動向に敏感で、現に1940年代から60年代初頭に有力であった「近代化」論に対する批判的検討は既に60年代後半から金原左門等によって行われていた<sup>(9)</sup>。その後「近代化」論を変形させた形で台頭してきた米国の再解釈学派（前述のアンドルー＝ゴードンやキャロル＝グラックもここに該当する）や日本見直し論者（オランダ人ではあるが、カレル＝ヴァン＝ウォルフレン等の日本異質論もここに含まれる）についても日本人研究者は

正確な把握に努めていたから、日本における日本史研究は、国際的な扱いとは違って、実際は英米人の日本史研究以上のレベルであったし、多分現在も何とかそのレベルを維持している状況と思われる（こういう言い方をあえてする理由についてはおわりにで後述する）。つまりこうした日本の実態を無視した英米人の日本史研究は、言語帝国主義的であるだけでなく、思想や態度の点でも帝国主義的スタンスと言わざるをえないが、同時に彼らの独善的と見られかねない学問的態度を知ることが、逆に日本人研究者にとって前述の島国根性からの脱皮につながる良い機会であろう。

ただ英米人の日本史研究はこうした問題を抱えているにしても、日本人にとっては政治的喚起だけでなく、学問的喚起を促すことが多い。具体的に言えば、ジャネット＝ハンターの*The Emergence of Modern Japan : An Introductory History since 1853*は入門書にしては難しいが、近代日本の通史であるから、日本史をある程度知っている日本人にはあまり得るものがないと思われる恐れがあるが、そうではない。とりわけ著者が最近の日本の歴史を通して、歴史を決定した事実それ自体よりも歴史的視角がより重要性を持つのではないかと述べている点は示唆的で、かつ前述のウォルフレンが日本異質論を唱えていた同時期に近現代日本を排他的で独自のとする見解を否定しているのも興味深く<sup>(10)</sup>、これらは私たちが無意識に陥りがちな視点に対する批判ともなっている。ハンターはこの他に日本社会における結束とコンセンサスの消滅が近現代日本のターニングポイントになるとしているが<sup>(11)</sup>、これは21世紀になって特に顕在化した格差社会問題を想起させるものがあり、20年近く前に書かれた物とは思えないほど、現在の日本人に問いかけるものがある。

また英米人の日本研究は入門的であるほど、却って今の日本の日本史研究が看過しやすい視点を浮かび上がらせることがある。特に日本経済史ではマルクス歴史学・経済学の影響が強く、自然環境が経済や社会にもたらした影響を軽視しがちであるが、そうであってはならないことや講座派や労農派の議論に対する失望が民衆史を生み出したものの、これらを折衷した歴史研究の方法論が必要であるといったマクファーソンの入門書の指摘は、研究者にも十分示唆的な内容であろう<sup>(12)</sup>。

他方で通史や入門書ではない研究書は、これらと比べれば言語帝国主義的傾向が弱まり、日本語の1次史料を読む傾向が強くなるが、それはより専門化された内容だからに他ならず、言語帝国主義に対する意識的な反省によるものではない。また内容的には国際関

係以外の研究では研究者の出身国を想起させることが少なくなり（特に翻訳本になればそうである）、ブルマの指摘のように、外国人というより個別性の方が際立ってくる。従って日本人の日本史研究と異なる特徴を英米人の日本史研究から見出そうとすると、国際関係あるいは日本との二国間関係を扱った研究に目を向けざるをえない。

二国間関係を扱った研究で、国際関係史に門外漢の筆者でも興味深く読めたのは、日本ではよく知られていない人物に焦点が当てられたり、知られている人物にしても日本人の研究者とは違う側面を打ち出している場合であった。特に日英関係に何らかの形で直接関わった人たちの分析は既に翻訳本も多く出ている<sup>(13)</sup>。筆者は当初、これらを読みながら知らない話を吸収すること自体を楽しんでいたが、ふとある疑問が浮上した。歴史にifは許されないとはいえ、もし仮に英国が日本を植民地化していたら、同様の歴史書は英国ではともかく日本で出版されたであろうかという問いである。よく考えてみれば、朝鮮半島や台湾の近代化に何らかの形で貢献した日本人が全く皆無であったはずはないが、歴史書に残る形で称賛されることは極めて少ないし、こうした行為は通常タブー視されている。つまり同じ社会貢献をしても国家間の関係で全く評価が変わってしまう実態に果たして英米人研究者は気付いているのか、楽天的と言えるほど彼らは英国人の国際貢献を評価しているのではないか…これらの問いが頭をかすめた時、筆者はあらためて英米人の日本史研究に横たわる歴史観について意識せざるをえなくなったし、批判的検証の必要性を感じたのである。次章では彼らの歴史観の何処が問題なのかを取り上げたい。

## 2. 英米での日本史研究に見る歴史観—批判的検証の必要性—

日英の二国間関係を扱う体系立った最近の研究としては、日本と英国の両方で日本語版と英語版で出された『日英交流史 1600—2000』5巻（東京大学出版会、2001年）があり、日英の政治・経済・社会の研究者の中でも第一人者が集まった点だけを見ても画期的な試みであった。また『日英交流史』の中身も多彩で知的刺激に溢れているが、とは言え、このシリーズにおいて日英の歴史学者の歴史観に関する議論は見当たらなかったのも事実である。無論、ワークショップでは議論されたのかも知れないが、少なくとも研究という形にされなかったのは確かであろう。だが仮に同様の形で日韓交流史といったシリーズを作れば、歴史観や植民地経営をめぐる議論は避けられず、こうした叙述は間違いなく

シリーズの中で重きを置くに相違ない。

付言すると、『日英交流史』では5 社会・文化の巻でスーザン＝タウンゼンド「矢内原忠雄と大英帝国—植民地改革のモデルとして」を掲載して、植民地問題に触れている。ここでは矢内原が英国植民地主義の功罪両方を認識しつつも、彼が英国の植民地改革や自治の動きを高く評価していたこと、彼が政治とは距離を置いたのとは対照的に英国の植民地主義批判者は政治と積極的に関わったことが書かれている。タウンゼンドは綿密な調査を経て客観的に論文を書いたと思われるが、とは言え、英国の植民地主義は日本のそれよりはまだ良く（「…大英帝国はすぐれて柔軟な政策のアプローチゆえに、日本の植民地行政官の間では植民地支配のモデルとみなされることもあれば、逆に非難されることもあった。」 p.166）、植民地主義批判も英国の方が強かったと短絡的に読もうとすれば読めくはない。さらに彼女は最近の研究から、大英帝国のインドへの帝国主義的支配は脆弱で経済・社会を完璧に変えるなぞ覚束なかったと述べているもの（p.176）、これは当時のインドの人々の感覚と遊離していないか、少なくとも戦後、韓国から植民地政策を手厳しく批判され続け、その声を間接的であれ聞いている日本人研究者であれば、このような疑問を提示し再考を促すことがあっても良かったはずである。もっとも実際に再考を促したのかどうかは判らないが、少なくともその痕跡は彼女の研究に留めていない。

思えば以上の話は奇妙である。何故日英関係を考察する際には相互の歴史観や植民地主義があまり議論されず、日韓関係では議論が過熱するのか。そもそも相互の歴史観を問う行為は、その国と如何なる関係であるかを問わず行われるべき学問的営為で、日本がその国との関係において従属的であったのか、逆に支配的であったのかは関係なく、相互理解を深めるためになされる必要がある。確かに日本の歴史学者は英国の学問的潮流の影響を受けやすく、その潮流を日本史研究で生かすことが使命と思っている研究者もいる位だから、日英の研究者の間に歴史観の齟齬がないと思いたいのかも知れない。しかしこれは筆者のように日英関係を専門としない第三者から見れば、知的植民地化以外の何物でもないし、かつて米国の「近代化」論を批判した日本人研究者たちと比べ何と気骨がないことかと思わずにはいられない。こんな状態からはいつになっても真の相互理解は生まれないであろう。

日英関係の歴史を紐解くと、英国が近代化に導く教師で日本が生徒といった構図で書か

れていることが多いし、それはある程度事実であった（付言すれば知的植民地化もこの構図と無関係ではない）。たとえば、日本の近代化に貢献したスコットランド人を取り上げたオリヴァー・チェックランドは『日本の近代化とスコットランド』（玉川大学出版部、2004年）<sup>(14)</sup>で、たいていのお雇い外国人は順応性があり事業計画の精神をよく理解していた（p.43）とプラス評価し、ダイヤー等の事例を挙げて、英国が日本の近代化に大きな貢献をした側面を強調している。しかし実際は尾高焯之助が明らかにしているように、明治前期の外国人技術者（多くは英国人）の中で、優秀な人材が来たと思われるケースは官営で8.3%、民間で3.2%程度に留まり、その一方で明らかな失敗例は官営2.6%、民間6.3%であった<sup>(15)</sup>。民間部門に至ってはむしろ失敗例の方が多い訳で、チェックランドは一部のお雇い外国人の役割を見て全体を過大評価した可能性があるが、この過大評価は同時に自国に対する過大評価とも言えなくはない。

英米は社会経済構造がかなり異なるとは言え、そもそも近代戦争に敗れた経験を持っておらず（厳密に言えば、米国はベトナム戦争でダメージを受けたが）、近代以降は専ら世界を支配する側に回っていたし、19世紀半ばには他国からの侵略を心配する必要がなくなっていた。言い換えると英米は自国の価値観を他国から壊された経験がないため、英米人の研究者も無意識なうちに母国の世界における役割を絶対視して過大に考えがちで、母国における価値観を他国の価値観と比較し相対化することは得意としていない。逆に日本人をはじめ、他国の人間が英米の価値観に擦り寄ることもあるため<sup>(16)</sup>、彼らは自分たちの思考方法に何ら疑問を持たずして確信を抱いていることが多く、これは歴史観の検証を不問に付した『日英交流史』を見ても明らかである。

これに加え、植民地化というマイナス面に対しては比較的甘い評価を、逆に技術貢献といったプラス面では過大評価を与えがちな上記の研究者たちの姿勢には、やや極論すれば帝国主義的価値観が見え隠れする。なお前述のチェックランドの著作にしても、グラスゴーは教育機関と造船業が発展していたため魅力的な教育が提供できたのではないかとしているが（p.72）、そこに集まる日本人留学生が必死に学ぶ背景に、英国をはじめとした先進国による半植民地化や経済的従属に対する恐れ—ある種のナショナリズムとも言えようか—が存在していたことまでに考えは及んでいないようである<sup>(17)</sup>。

無論、英米人の日本史研究者に向かって帝国主義的価値観に左右されがちな歴史観が何



処かあると言え、激怒されることはほぼ確実で、彼らは否定するのに躍起になるであろう。つまりそれほど彼らの内面に深く根付いているために意識すらされないのである。ただもし彼らが他国語を読み、英語への翻訳作業に積極的であったならば、母国に対する過大評価は減じ、歴史観の相対化ももう少しなされたに相違ない。これは言葉を直すという過程で文化の相違を痛感し、自国で養われた価値観を相対化するからだが、仮に翻訳をしないにしても、母国語と違う言語で学ぶことは同様の効果が見込まれると思われる。実際、筆者はMarius B. Jansen, *Japan and Its World: Two Centuries of Change* (New Jersey: Princeton University Press, 1980) と加藤幹雄による翻訳本の『日本 二百年の変貌』(岩波書店、1982年)の両方に目を通したが、翻訳には詳細な年表が加えられていて内容が原本以上に充実しており、一応日本語も英語も読解できる立場というのは有難いものだと痛感した。当然のことだが、英語さえ読めれば研究が事足りるというのは日本史研究に関してはありえないし、裏返して言えば日本人の日本史研究者でも外国人研究者の歴史観と相対化する意味で外国語は必須なのである(そうは言っても日本史研究者は語学が苦手故に日本史を専攻したケースが割合多いのだが…)

筆者は本稿の最初に日本史研究は日本人のものといった島国根性を打破する意味でも、外国人による日本史研究に目を通すべきであると述べたが、実は英米人の日本史研究も英米中心の歴史観と言語に左右されがちで、ある種の島国根性が存在することを留意すべきであろう。しかも英米人の日本史研究の多くを見ていると、アジアで唯一近代化に成功したのは何故かという動機から研究を始めたことは理解できても、何故そもそもこのような動機を持ったのか、根底にある問題意識が意外と不明瞭なことが少なくない。だが以上のような英米人の研究動向の欠点を知ることは、日本人の日本史研究者にとっては「人のふり見て我がふり直せ」なのである。そこで最後にこうした視点から日本人の日本史研究者のあるべき姿について僭越ながらも簡単に考察してみたい。

#### おわりに—知的植民地化とどう闘うか—

英米人の日本史研究の根底に帝国主義的な歴史観がある程度存在することは繰り返し述べた通りであるが、これについては既に「近代化」論を批判的に捉えていた日本人研究者たちを中心に日本の学界では60年代後半以降敏感に反応していた。ところが90年代以降、

社会主義体制崩壊もあって有力な分析方法論であったマルクス経済学・歴史学が衰退し、歴史学に「大きな物語」が求められなくなり、専ら個別研究が発展してくると、英米人の日本史研究が日本をどう捉えているかという問題について、かつて「近代化」論を批判した研究者たちはともかく、若手から中堅の反応は真二つに分かれたと考えられる。ひとつは個別研究に没頭して全く関心を見せないタイプ、もうひとつは自分の個別研究との関連のみで関心を持つタイプである。これは一見後者の方がまだ良いと思われがちであるが、日本の将来を展望する視点がなく学問的に利己主義である点ではどちらも同様だし、後者は英米人の日本史研究の問題点に鈍感であるがために、却って英米の歴史観に簡単に染まる恐れもある。要するに今の日本史研究はベテランの研究者（主として戦前生まれ）が第一線を退けば、前述のような高い国際レベルを維持することは難しいと思われるのである。

さらに現在の英米人の日本史研究それ自体は、彼らから見れば外国を扱っているとはいえ、上述の性質から真の意味での国際的研究にはなっていない。それが一見国際的研究に見えるのはアングロサクソンが経済的覇権を握り、国際政治のパワーになっているからで、彼ら（特に米国）が力を失えば、彼らの価値観も国際基準としての値打ちを失うに相違ない。こうした脆さを認識しないで、単に自分の問題関心のみから英米人の日本史研究に擦り寄るのは、かつて「近代化」論に乗って研究を進めていた学者が後に着地点を見つけるのに大変苦勞したのと同様の結果を招くであろう。

もっとも日本史研究は他の学問と比べれば、英米の価値観にまだそれほど振り回されずに済む学問である。それ故、英米人の日本史研究を取り入れても、盲従せずに歴史観を相対化し、バランスの良い視角を保つことは不可能ではない。思えば、日本はまだ世情が定まらず激動が続いていた明治初期の段階でさえ、お雇い外国人の建言を聞きつつも盲従せず主体的に選択を行い、独自の制度を生み出したのであるから<sup>(18)</sup>、何をするにしてもその頃と比べればはるかに恵まれた現在、こうした明治の精神を学問にも引き継ぐことは当然可能であろう。言うなれば、特に歴史家は過去を教訓としなければ、あるべき研究スタンスも取れない訳で、若手・中堅の研究者も自分の問題関心からのみ歴史を見るのではなく、歴史家としてどうあるべきかを考えつつ歴史を学ぶ必要があるのである。

## (注)

- (1) 拙稿「視点 経済史研究の現状と将来」(大東文化大学東洋研究所『東洋研究』157号、2005年11月)。
- (2) 何を以て見聞録とし、何を以て研究と言うのかは意外と難しい。前者は見たままの印象を書き、後者は分析があると言われるが、他方で分析をどう捉えるかといった問題もここでは生じるし、印象を全く無視した研究もありえない。ただ研究と言った場合は、多かれ少なかれ、研究者間では知っていることが当然とされる歴史や経済の方法論をある程度ふまえ、統計的実証を行っていることが前提となろう。
- (3) Ian Buruma, *Inventing Japan 1853-1964* (Weidenfeld&Nicolson, 2003), 小林朋則訳『近代日本の誕生』、ランダムハウス講談社、2006年のp.5の「日本語版への序文」。
- (4) 原本はAndrew Gordon, *A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present* (New York/Oxford: Oxford University Press, 2003) である。
- (5) Mikiso Hane, *Modern Japan*, 3rd. ed. (Colorado/Oxford: Westview Press, 2001), pp.499-531.
- (6) Haneは1922年、カリフォルニアのホリスターに日系人の両親の間に生まれ、両親の意向で広島に渡ったが1940年に帰国、その後イエール大学にて軍の指揮下にあった日本語講座を担当した。その後イエール大学で学士・修士・博士号を取得、トレド大学を経てノックス大学に移り、1992年まで在職し、2003年に歿した時にはノックス大学名誉教授であった。詳細はノックス大学による彼の訃報<http://www.knox.edu/x6196.xml> (2007年5月6日閲覧)を参照。ちなみに彼は丸山眞男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会、1952年)の英語版*Studies in the intellectual history of Tokugawa Japan*, (Tokyo: University of Tokyo, 1989)の翻訳者である。
- (7) 筆者が英語の日本史文献を探す際に最初に参考にしたのは、Kenneth D. Brown, *Britain and Japan: A Comparative economic and social history since 1900* (Oxford/ New York: Manchester University Press, 1998)、John Benson and Takao Matsumura, *Japan 1868-1945: From Isolation to Occupation* (London: Longman, 2001)といった英国での日本研究であったが、英語を中心とした自国語中心主義の傾向は同様で、後述のHunterの著作も例外でない。
- (8) Gordon Daniels & Reinhard Drifte eds., *Europe & Japan: Changing Relationships since 1945* (Kent: Paul Norbury Publications Ltd, 1986).
- (9) その研究成果は金原左門『「近代化」論の転回と歴史叙述—政治変動下のひとつの史学史—』、中央大学出版部、1999年に所収されている。
- (10) ウォルフレンは1989年に*The Enigma of Japanese Power* (日本語訳は1994年で、早川書房から篠原勝訳で『日本／権力構造の謎』として出版)を出版し、日本の「特殊性」を強調し日本批判を展開していた。Janet E. Hunter, *The Emergence of Modern Japan: An Introductory History since 1853* (New York: Longman, 1989), p.321.
- (11) *ibid.*, p.322.
- (12) W. J. Macpherson, *The Economic Development of Japan c. 1868-1941* (London: Macmillan, 1987), pp.11-14.
- (13) 代表的な事例としては、Sir Hugh Cortazzi and Gordon Daniels eds., *Britain and Japan 1859-1991: Themes and Personalities* (London: Routledge, 1991)が挙げられ、日本語訳では横山俊夫解説、大山瑞代訳で、思文閣出版から1998年に『英国と日本 架橋の人々』として出版された。
- (14) この本は英語名が*Technical Transfer and Cultural Exchange Between Britain and Japan*とされているが、英

語原本はなく、英語では各章が各論文の形で存在していたのを加藤詔士・宮田学の両氏が編纂し翻訳した物である。

- (15) 尾高煌之助『職人の世界・工場の世界』、リプロポート、1993年、pp.89-90。
- (16) 実は同じ英語で書かれているにしても、英米人以外の執筆者の場合は、自国と英語圏、日本というように概して多角的な視野で見ていることが多い。たとえばハーグ出身のイアン＝ブルマは*The Wages of guilt : memories of war in Germany and Japan* (London : Vintage, 1994) を出版しているが（日本語版は石井信平訳で『戦争の記憶 日本人とドイツ人』としてTBSブリタニカから1994年に出版）、これを読むと、ブルマがドイツ語や日本語の教科書をはじめ、多くの1次史料をくまなく検証して国際的な研究に仕上げたことが判る。
- (17) Olive Checkland, *Britain's Encounter with Meiji Japan 1868-1912* (London : Macmillan, 1989)、日本語訳は杉山忠平・玉置紀夫訳『明治日本とイギリス 出会い・技術移転・ネットワークの形成』、りぶらりあ選書／法政大学出版局、1996年である。日本語版pp.218-219によれば、グラスゴーにおける日本人の生活が緊張感に満ちたものであったことは指摘されているが、叙述はそこまでに留まり、彼らの内面に触れた記述はない。
- (18) 中村政則／石井寛治／春日豊校注・編『日本近代思想大系8 経済構想』、岩波書店、1988年のp.510の「解説」。